

BOOK REVIEW 2

ゴジラ音楽と緊急地震速報 - あの警報チャイムに込められた福祉工学のメッセージ -

伊福部 達 監修 筒井信介 著

ヤマハミュージックメディア ISBN-13: 978-4636880779 2011年12月

評者：山内勝也（長崎大学）

♪チャラン・チャラン♪

♪チャラン・チャラン♪

緊急地震速報です。

強い揺れに警戒してください。

テレビから流れるこの緊急地震速報のチャイムを聞いて、ドキリと身構えた経験がある方も多だろう。通常は、最大震度5弱以上の強い揺れが予測された場合にテレビ等を通して広く一般に発表されるものである。2007年から運用されているシステムではあるが、昨年3月11日の東日本大地震以降は発表数が多く、我々の耳にしっかりと印象づけられる結果となった。

さて、ネット上でも「誰が作ったのか」「どうやらゴジラのテーマから作られたらしい」と話題騒然となったこのチャイム、どのように生まれたのだろうか？また、なぜ、あの音は耳につき、適度な緊張感をもって我々を身構えさせるのだろうか？

結論を申し上げますと、あの有名なゴジラのテーマ音楽から緊急地震速報が作られたのではない。（このことは、本書でも冒頭で明かされているのでご安心を...）ゴジラの音楽を作曲した、作曲家・伊福部昭の交響曲「シンフォニア・タプカーラ」第三楽章 Vivace の冒頭の和音が原型となり、2007年に甥であり本書の監修者である東京大学教授・伊福部達が緊急地震速報のチャイムとして制作したものである。健聴者はもちろん聴覚障害者や加齢性難聴者の注意もひきやすく、速やかな避難行動を促し、なおかつ過度な恐怖感を与えぬよう、伊福部達氏の福祉工学的知見に基づいて設計された。その設計思想と、原音から音楽的要素を減らしながらサイン音として完成させる過程は、本書に詳しく紹介されている。

本書は、このような緊急地震速報の成り立ちを紹介するだけのものではない。伊福部達氏の切り拓いた

音の福祉工学という学問分野、作曲家・伊福部昭氏の音楽、そして蝋管に刻まれた100年前の樺太アイヌの歌。一見すると関連の薄そうなこれらが、ある種の謎解きのような魅力的なストーリーで展開される。

特に、およそ100年前に、ポーランドの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキが樺太アイヌの歌を記録した蓄音機の蝋管（レコード登場以前の初期の録音媒体で、円筒型の蝋管表面に溝を切ることで音を記録する）の復元・再生の過程は面白い。伊福部達氏が、蝋管のひび割れやカビの発生などの困難に直面しながら、修復しその音を再生する過程を読み始めれば、ワクワクしないエンジニアや研究者はいないであろう。

また本書は、副題の通り、あのチャイムをきっかけとして、福祉工学のメッセージを伝えるものでもある。伊福部達氏による福祉工学という学問分野形成の足跡が紹介され、本書後半には「福祉工学が秘める可能性」として、音声情報を触覚情報に変換する触知ボコーダ、人工内耳や人工咽喉、さらにエコーロケーションによる障害物知覚からVR酔いに至るまでの、幅広い福祉工学の分野が紹介されている。研究分野入門書としても大変興味深い。

余談となるが、先日、伊福部達氏による「緊急地震速報ができるまで」と題した講演を聴く機会を得た。講演では緊急地震速報チャイムの制作過程がデモとして何度も流されたので、会場外で聴こえた人が誤解してしまわないかと心配したが、これは杞憂であったようだ。しかし、ちょうどその夜にたまたま大きな地震があり、関東東北では緊急地震速報のチャイムが鳴り響いた。これは、評者を含め、講演を聴いた全ての人に忘れられぬ経験となったと思う。

ただし、「本書を購入した日に緊急地震速報が...」という話は（評者の知る限りは）聞いておりません。どうぞ安心してご購入ください。

